

空間から場所へ：

マレーシアの住宅団地における華人コミュニティ構築の事例から

京都大学GCOE研究員 櫻田涼子

マレーシアは、1957年にイギリスによる植民地統治から独立を達成した後の経済政策の転換により、国家のあり方だけでなく、そこに住まう人々の暮らしや家族もドラスティックな再編を経験した社会である。1970年代以降のマレーシアでは、農村開発から工業を中心とする経済構造への転換が目指され、それまで農村居住が主流だったマレー人の社会参加を促し、貧困の根絶と社会再編を重視する新経済政策（New Economic Policy）が国家開発政策の指針となった。経済構造転換の過程で目指されたのは、農村から都市へと労働者が流入することにより急増した都市人口の収容を可能にする大量住宅供給を実現すること、さらには最低限の生活の質を国民に保証する住宅供給量の確保することであった。このようにして、住宅団地開発と低価格住宅供給はマレーシアの社会構造の再編を目指す近代化政策の一環として行われたのである。社会福祉政策的側面の強い低価格住宅供給を中心とする住宅政策の施行により、マレーシア国内には核家族の居住を想定した画一的構造の〈近代住宅〉が陸続と誕生し、働き盛りの夫婦と子どもから成る〈近代家族〉が登場することとなったのである。

本発表では、この住宅政策を受けて1980年代に造成・分譲が始まったマレー半島中部に位置するとある郊外地域の住宅団地を事例として取り上げ、そこに住む人びとが「与えられた空間」である画一的な住宅をいかにして歴史性と個別性を持った〈家〉という場所に改変したのか、そのプロセスを住宅との関係、及び住宅団地で開催される中元節儀礼の事例を中心に考察することを目的とする。

調査地域は働き盛りの若者の都市部流出が絶えない場所であり、この場所を出身地とする人びとは、観念的な故郷としてこの地を捉えて往来を重ね、不在にも関わらず住宅を改造し、住みやすい空間へと住宅を変容させていく。このような絶え間ない住宅と人の相互構築的關係が繰り返されることにより、住宅はかけがえのない場所へと変化し、家族關係が具体的に現れた家という場所を生きることにより、与えられた空間は彼らのかけがえのない場所へと変化する。また過去との連続性が観念的に維持される場所としての家と地域社会を創出するための努力は、旧暦7月に住宅団地中心部で実施される中元節儀礼にも看取できる。

本発表では、家をめぐり取り結ばれる諸關係とコミュニティにおける過去との連続性を維持するための諸実践を中元節儀礼の事例を通して考察することにより、変化する社会環境に生きるマレーシア華人のリアリティに接近する。